

スポーツ哲学の先駆者たち (1)

関根 正美

本稿は研究集録142号掲載の「西洋古典におけるスポーツ哲学」に続く内容であり、筆者のスポーツ哲学に関する研究計画の一部に位置づけられる。スポーツを哲学的に解釈した人物の言説を、H. レンクとの関係を視野に入れつつ論じる。今回はジーモン・モーザー、カール・アダム、ホセ・オルテガ・イ・ガセーを対象として取り挙げる。哲学とスポーツという一見すると無関係な現象に接点を見出した点で、三者ともにスポーツ哲学の先駆者としての立場が認められる。

Keywords : スポーツ, 技術哲学, 達成哲学, 生の哲学

1. ジーモン・モーザー (Simon Moser: 1901~1988)

モーザーは技術哲学の分野における開拓者であり、カールスルーエ大学哲学科を確立した人である。カールスルーエ大学はもともと工科大学として出発しており、自然科学や情報、数学などの組織に加えて人文社会科学、スポーツ科学、音楽などの学科が徐々に整えられてきた。したがって、哲学や社会学、スポーツ科学などの学科が確立されたのは比較的あたらしいといえる。

哲学科のある建物に行くには、カールスルーエ城の正面から庭園を通って行くルートといわれる大学構内を通って行くルートがあるが、情報科学の研究棟に沿って哲学科に至る小道は 'Simon Moser Weg' と名付けられている。レンクの先代の哲学正教授の名が冠されているわけである。その標識にはモーザーの略歴も記されており、「技術哲学のパイオニア」と紹介されている。モーザーは工科大学に置ける哲学研究と教育をレンクが正教授に就任するまで担っていたのである。モーザーとレンクが編集に関わった書物で (バイヤーも加えて三人の編集による)、スポーツ哲学史において重要なのが "Philosophie des Sports" (1973) である。この論集にモーザーは2編の論文を寄稿している。

2編のうちの一つは「スポーツにおける達成と快楽 (Leistung und Lust im Sport)」(S. 34-41) である。モーザーがこの論文を執筆したきっかけは、

1970年にカール・アダムがカールスルーエ大学で行った「達成哲学に関する非学術的考察」と題する講演である。ここでモーザーが主張していることは、「達成と快楽は対立するものではない」ということである。モーザーの考えによれば達成と快楽ないし楽しさは同居しうるのであり、達成自体の快楽というものが認められるということである。達成自体の快楽という点について、モーザーは社会学的な立場からもそれを考察している。当時、リオデジャネイロのツッカフテス北壁への登頂が成し遂げられた。彼はそれに対し「社会的なマネジメント」(sozialen Management) によって成し遂げられたと批判的な評価を下すのであるが、それでも「達成自体の快楽が存在する」としている。また、スキーマのアルペンに関して言えば、世界選手権はスキーマーカーに依存しているという。それは興行的にも技術的にも言えることだろう。北京オリンピックを目前に控えた2008年6月、日本では水泳のスピード社製の水着問題が起こった。オリンピック代表の有力選手たちがスピード社の水着を支持した。だが、水着によって記録が大幅に影響を受けるとなると、競技者自身の達成そのものが問題視されることになるだろう。記録の樹立は競技者個人の達成によるのではなく、水着の性能というテクノロジーによるものだとされるかもしれない。モーザー哲学から言えることは、たとえテクノロジーによって記録が助長

されることがあったとしても、競技者の内面には「達成自体の快楽」が存在するということである。オリンピックや日本の高校野球は商業主義であるとの批判を受けている。だが、競技者自身の達成は存在するし、競技者たちが内面で感じる「達成自体の快楽」の存在も認めざるを得ないのではないだろうか。商業主義という理由でイベントそのものを批判するのは別のレベルで、競技者における個人的な達成そのものへのまなざしは決して時代遅れではない。メガ・イベントが話題を席卷する現代スポーツにおいてスポーツを語るのであれば、システムに目を向けるだけではなく、競技者の内面へのミクロの視点が重要ではないか。モーザーはこの論文の後半で、「われわれは快の充足と楽しみを将来スポーツにおいてより成就することができるだろうし、そのようであることが求められるであろう (Wir könnten und sollten in Zukunft mehr leisten für das Lustvolle und Lustige im Sport.)」(S.40)と述べている。スポーツの原点を考えるうえで、この言葉は示唆的である。

もう一つの論文は、「スポーツの哲学的分析へのアプローチ (Ansatzpunkte einer philosophischen Analyse des Sports)」(S.138-162)と題されるものである。論文の冒頭でモーザーは次のように述べている。「スポーツは現代の大衆現象であるばかりでなく、精神にも影響を与えている。それゆえスポーツは単なる社会的あるいは心理学的な関心を越えて哲学の領域においても問題にされる。スポーツを哲学的に探求するにあたり、『スポーツと精神』なるテーマから最初の手がかりが得られるであろう (Der Sport ist nicht nur eine Massenerscheinung unserer Zeit, sondern prägt auch ihren Geist mit. Daher rückt er über ein bloß soziologisches oder psychologisches Interesse hinaus auch in das Blickfeld der Philosophie. Einen ersten Ansatzpunkt, um ihn philosophisch zu untersuchen, könnte man vom Thema "Geist und Sport" her gewinnen.)」(S.138)。「スポーツとは何か」を哲学者の立場から論及するこの論文は二つの部分から構成されている。前半の部分では登山とスキーの例を示しながら「スポーツと精神」についての考察を進めている。

モーザーによれば、ロマンに彩られた過去の登山や日常に対して独自の神秘性や遊戯性を有していたスキーが現代において変質しているという。それらを変質に導いた決定的な要因は科学である。論文の前半では「スポーツと精神」と並んで「科学」の概念が重要な役割を演じている。彼は、「たとえば、

登山における客観的尺度に基づいた難易度の設定やスキー滑走の運動を物理学的に分析するなどにみられる科学と技術の浸透」が山岳スポーツにみられると述べ、科学的客観の世界がスポーツに及ぼす影響について指摘している。

次に彼は西洋における学問精神の起源について考察し、スポーツの精神性との共通性を指摘する。「しかしここでわれわれは、何のために学の成立における西洋精神の遊戯的な性格をありありと思い浮かべるのであろうか。われわれは、そこに真のスポーツマン、真の登山家、そして真の学者に共通する一つの基盤を見出すからである」(S.150)。このようにモーザーは、スポーツと学問の類比を試み、両者に共通する精神性として「遊戯的性格」を見出している。スポーツや学問、そして文化一般に「遊戯的性格」を認めるテーゼは、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』によって知られている。モーザー自身、この論文でホイジンガの『ホモ・ルーデンス』を参照していることから、その影響は疑いえない。たとえばモーザーは、「最終的にあらゆるスポーツ教育を純粹かつ自由で美的な遊戯理念の下に据えること」(S.151)が今日のスポーツに必要であると言い、「その観点でいうと、あらゆるプロスポーツや達成スポーツは色褪せ、価値を失う」(S.151)と述べる。この部分もホイジンガの「スポーツは遊びの領域を去っていく」(ホイジンガ、里見訳、1983, pp.324-325)の項目における次のような言葉を思い起こさせる。「近代社会の技術は巨大な示威運動の効果を完全性の域まで高めるすべを知っているが、その完全性をもってしても次のような事実を改めることはできない。つまり、いくらオリンピックやアメリカの諸大学におけるスポーツの組織化やさらには声高らかに宣伝された国際競技が頑張っても、いかにせんスポーツを様式と文化の創造活動にまで高めることはできないのだ。それは演ずるものと見ているものにとってどれほど重要なものであれ、所詮は不毛の機能にしかすぎない。そこでは昔の遊びの要素は大部分死滅してしまった」。スポーツについてホイジンガが語る外面的な賑やかさと精神の不毛は、モーザーにも引き継がれている。この論文の前半部分は、スポーツの「全体的にみれば、スポーツを精神的なものにすることが必要である」(S.151)との言葉で終えている。

モーザーが論文の後半部分で重要視するのは、ボイテンディク (Buytendijk) の哲学である。特に注目されるべき概念は「主体」、「自己運動」、「生命空間および時間」などである。もっとも、彼はボイテンディクの哲学に必ずしも全面的に賛同している

わけではなく、それらの概念に対する批判的な吟味を重ねながら論を進めている。しかし全体として、ボイテンディクにおける重要な概念を評価しているといえる。モーザーは、「私はボイテンディクによる人間運動の生物学から、ある基本概念および基本テーゼを際立たせた。その議論はまたスポーツ哲学にとって重要なものになると思われる」(S.160)と言っている。

モーザーがスポーツ哲学における課題とみなす運動は、物理的かつ客観的な運動ではない。モーザーによれば、ボイテンディクの「目的志向的な運動が行われるとき、物理生理的出来事に対して以上に生命機能的な出来事にとっての時間システムが存在するであろう」という問いかけは決定的に重要だという。なぜならば、「生命的な自己運動は、生の空間および時間を前提としている」(S.161)と考えられるからである。

モーザーはヴァレリーの「おお、運動よ、私は汝の中にいた。そしてあらゆる者の外部に (Ich war in dir, o Bewegung, außerhalb aller Dinge…)」という言葉で論文を終えている。ヴァレリーの出典は1921年の「魂と舞踏」である。この作品はソクラテスやパイドロスを登場させる対話編の形をとっており、よく知られるこの言葉は踊り子であるアティクテが最後に語る言葉である。岩波文庫版の訳者である清水徹はその解説の中で次のように述べている。「この幕切れのアティクテの台詞の意味するところは捉えにくい。舞踏の極限において意識はまさしく身体の踊りそのものと化し、そしてそういう身体のもたらした肉体と精神との融合において、自分は《魂》そのもののなかにいた、とでもいうのだろうか」(岩波文庫, 2008, p.242)。清水はヴァレリーの言葉に疑問を投げかけてはいるものの、それに対する明確な解答は出していない。確かに明晰な論理性によって語られている内容ではないので、この言葉に対して客観的な解釈を志向することは困難である。ただ言えることは、モーザーが考えるスポーツ哲学の対象は物理的時間ではなく、ヴァレリーとボイテンディク思想の結節点とみなされる生命的時間からもたらされる運動であり、その経験的内実なのである。

以上のことから次のことが言える。モーザーがスポーツ哲学の課題と考える「精神」は人格形成や倫理道徳を意味するのではない。スポーツ運動からもたらされる一種の美的体験ないし経験の領域が、彼の想定する「精神」である。モーザーはフィギュアスケートを例に、「つらい訓練が巧みな技へと急変したり、トレーニング中に何度も中断された動きがあ

る瞬間に正しい回転運動へ変わるといった精巧な運動が体得された技術の中に、幸福な瞬間の急転が存在する」(S.161)と言う。物理的な運動ではなく生命としての自己運動を考察の対象に据え、「幸福な瞬間の急転が存在する」生の層へと思考をめぐらすことがモーザーの提唱したスポーツ哲学なのである。

2. 再びカール・アダム

ここで再びカール・アダムに前回とは多少異なった役割で登場してもらおう。彼の人となりについてはすでに述べたので、ここでは彼のスポーツ哲学そのものを追ってみたい。

「達成の構造は、いかなる領域にあっても同じである (Die Struktur der Leistung ist auf allen Gebieten gleich)」。これがアダムの根本思想であり、ボートを通じてレンクら教え子に伝えた哲学である。スポーツも芸術も学問研究の分野であっても、人間が何事かを成し遂げることがなければ成立しない。アダムは人間の達成行為について、それがスポーツであれ、芸術であれ学問研究であれ、同じ構造を有していると考えるのである。

レンクには、このアダムの基本テーゼに関する一つのエピソードがある。1958年に彼は23歳で最初のヨーロッパ選手権を舵なしフォアで獲得し、同時に博士論文の準備もしなければならぬ状況にあった。ヨーロッパ選手権の4週間後に二人の審査員に対して論文の申請をしなければならなかったのである。このままヨーロッパチャンピオンとして競技を続けるべきか学問研究の道を選択すべきか。彼にとってボートも哲学も同じように魅力的な生の対象であった。両者ともに過酷なトレーニングを自分に課さねばならず、夢中にさせる対象であり、自分を興奮させるものだったのである。このとき、1960年に開催されるローマオリンピックは2年後に迫っていた。レンクは悩む。彼は葛藤をアダムに打ち明け、どちらを選択したらよいか助言を請う。この時のレンクの問いかけは、"solch ein wissenschaftliches Examen ist genau wie ein wichtiges Rennen. Das gleiche sture Training vorher, das gleiche Startfieber, die gleiche Adrenalinausschüttung; und wenn du vom Sport her damit Bescheid weißt, schneidest du viel besser ab als die anderen."である。レンクはスポーツに通じた専門家の立場からの助言を求めている。この状況証拠から推測するかぎり、レンクは二者択一の問題としてボートを選択する方向に傾いていたような気がしてならない。もしそうであったならば、哲学者レンクは存在しなかったかもしれない。それはともかく、

アダムの答えはこうであった。「達成の構造というものは、試験とスポーツの競争に限らず人生の中で成し遂げることにすべてにおいて同じであると考えべきだ (die Struktur der Leistung nicht nur bei Examen und sportlichem Wettkampf, sondern bei allen Lebensleistungen gleich sei)」(Adam, 1978, S.85「達成トレーニングと学校スポーツとの関連について」)。これはアダムが語っていることなのであるが、二人の関係がスポーツの単なるコーチと選手というだけでなかったことをうかがわせる話である。

また、アダムは別の論文でもレンクを引き合いに出して次のように言っている。「ラッツェブルクのボート選手たちは職業教育(キャリア形成)という点でまったく実力を発揮しなかったわけではない。ハンス・レンクのように並外れた達成をなした例もある。彼はオリンピックで優勝した一年後に“最大の賛辞を伴って”博士号を取得し、同時にスポーツ分野における最高の学問的業績という理由でカール・ディーム賞を得たのだ(Kein Ratzeburger Ruderer hat bisher in der Berufsausbildung kraß versagt, wohl aber gibt es Beispiele für überdurchschnittliche Leistungen, wie Hans Lenk, der ein Jahr nach seinem Olympia-Sieg sein Dokorexamen mit “summa cum laude” bestand und nebenbei den Carl-Diem-Preis im Wettbewerb um die beste wissenschaftliche Arbeit auf dem Gebiete des Sports gewann)」(Adam, 1978, S.161)。いずれにせよ、アダムはレンクを自分の達成思想を証明する存在であると考えていたのではないだろうか。

このような達成に関するアダムの見解に対しては異論もあるだろう。スポーツも芸術も学問研究も独自の構造があり、われわれは異なる方法や態度でそれら諸領域に関わらざるをえないからである。スポーツと芸術と学問研究が同一の行為領域でないことは自明である。スポーツと学問に話を限ってみても両者を同一視するわけにはいかない。たとえば若い時に競技に専念することと、競技生活を終えてから研究生活に入ることは生活の仕方も努力の方向も異なるであろう。身体トレーニングやスポーツの技術練習に生活の大部分を費やすことと、読書と思索と執筆を生活の中心とすることは全く異なる身体と精神の活動を必要とする。具体的な行為のパターンだけを考えれば、これは事実である。達成をめぐる議論が行為のパターンや行為の形のみを問題にするならば、競技者は学問研究を志すことにおいて圧倒的に不利であるといえる。人生の前半を競技に費やす

生活は、同じ時期を最初から学問研究に費やすことに比べて無駄な時間を費やしてしまうことになる。日本のシステムでいえば、大学の学部課程を勉強よりも競技中心の生活が占めたとして四年間の差が出る。20代後半まで競技を続けるとなると、博士課程における研究トレーニングの時間をほとんど失う計算となる。しかし、本当にそうなのだろうか。問題は外面的な行為の形ではなく、精神としての達成の構造なのである。アダムは競技と学問あるいは異なる種類の人間の行動を貫く達成の構造に対して、まなざしを向けている。この点を考えてみよう。

アダムは1970年にカールスルーエ大学にて、“Nichtakademische Betrachtungen zu einer Philosophie der Leistung (達成哲学の非学術的考察)”と題して講演を行っている。ちなみにこれは1973年にレンクらによって編集された*Philosophie des Sports*に収録されている。ここでアダムが言おうとしていることを簡潔に示すならば、「スポーツにおける人間の達成行為を一般的な意味での達成行為における一つのモデルとして用いようとする」(1973, S.22)点にある。「達成(Leistung)」という言葉には大きくわけても二つの意味がある。一つは物理学における時間単位の仕事量のように「客観的な尺度」で測定できる意味である。もう一つはピアニスト、科学者、文学者、政治家などにおける「客観的な尺度」では測定することのできない達成である。アダムによれば、「われわれが人間社会にとってのスポーツの意義を探求するときは、この立場での概念が中心になる(Wenn man die Bedeutung des Sports für die menschliche Gesellschaft untersucht, ist die Stellung des Begriffs zentral)」(1973, S.22)という。そうはいつても、スポーツにおける達成尺度は多様である。たとえば陸上競技や水泳のように時間や距離という物理学的測定によって達成比較が可能な種目もあれば、体操競技やフィギュアスケートのように審判の主観あるいは合議によって達成比較が行われる競技もある。スポーツで難しいのは、これらに加えてさらに球技や格闘技など客観的に得点化されてはいるものの審判の主観が達成尺度に影響を与える種目が存在することである。したがってアダムによれば、「さしあたってわれわれは、客観的方法、つまり物理的測定による達成の比較がここで限られた範囲でのみある役割を演ずることを確認しなければならない」(1973, S.27)という。

ここで問題なのは、客観的ないし物理学的尺度から判定された達成が人間にとって価値の高い達成かどうかという点である。「人間にとって価値の高い

達成」とは、「幸福」の概念と結びついており、「闘争、ストレス、不快感からの解放を意味するものでは決してない」(1973, S.29)。では、アダムが考える「人間にとって価値の高い達成」あるいは「幸福」の概念とはどのようなものなのだろうか。それは挫折の体験をも含む成功体験であり、自己有能感(自己効力感)をもたらす達成である。彼は次のように言う。「学習のない人間の生などはありえない。すべての学習は試行錯誤のメカニズムに由来している。いかなる誤りも挫折と結びついており、挫折のない人間の生もまたありえないのである」(1973, S.30)。また競技者に関しても次のように言っている。「スポーツにおいて、ある競技者が自己の能力と人格を最高度に発展させるためには、挫折と成功体験の一定の関係を必要とすることを明白に見て取ることができよう」(1973, S.30)。

確かにスポーツにおいては達成の客観的尺度の存在を認めざるを得ない。サッカーならば2対1の場合、2点をマークした方が勝利を達成したことになるし、採点競技の場合であっても体操競技などは9.95の得点を出した方が9.90の選手よりも「よりよく成し遂げた」ことになる。人間のあらゆる行動領域でもそれは言えるだろう。たとえば音楽のコンクールでもいえるだろうし、教育の場で試験を行うことも客観的尺度で達成を評価することである。だが、スポーツを一つのモデルと考えると、そこでの達成行為には客観的尺度によっては評価しきれない人間の行為がある。挫折や試行錯誤を含みながら自己が価値ある存在だと認識へ導く達成がそれである。ここに達成哲学を展開する意味をアダムは見出していると思われる。アダムは次のように言う。「現代に横たわる困難な問題は、自然科学と技術が規範的思惟よりもはるかに速い速度で発展しているということと、規範を伴った技術が未だ存在していないということから明らかに起こっている。技術文明の条件の下ですべての人に対し人間らしい生活を可能にさせるような社会形態、行動型、規範が発展させられねばならない」(1973, S.33)。

客観的な数値によって測定可能な達成がすべてではない。記録を更新する方向のみがスポーツにおける達成の進歩でもない。「より早く、より高く、より強く」に加えて「より人間的に」という方向がある。アダムはボートの指導者としてオリンピックや世界選手権で優勝する競技者を輩出した。だが、競技で勝つことがすべてであると考えていたのではなかった。競技者との関係にいても勝利を目指す道程においても、人間として相応しい達成を重視した。莫大な経済的利益をもたらす記録や名声を呼び込む

勝利が、アダムにとっての真の達成ではないのである。このようなスポーツにおける達成モデルを通して人間一般の行動を分析する試みは、人間学の様相を帯びているといえる。アダムはスポーツを通して哲学的人間学を展開したのである。

アダムのスポーツ哲学はレンクに受け継がれる。ボートというスポーツ実践を通して、「成熟した競技者」や「民主的トレーニング」といった思想内容に結実してゆく。このことについては別の機会に述べたい。

3. オルテガと生の哲学

近現代に属する思想家たちもスポーツについて断片的に記述を行っている。ここではレンクが直接引用しているスポーツに関する思想を取り上げ、スポーツ哲学の先駆者たちの存在を明らかにしたい。

「オルテガの哲学は、欲求、気力、気質、慣習に関して、あまりに単純にすぎ、生気論的にすぎ、生物学主義的にすぎ、抽象的かつもっぱら存在論的でありすぎるとともに、その一方では、逆にあまりに社会的でなさすぎ、社会-文化的でなさすぎ、人間学的でなさすぎ、歴史的でなさすぎる」(Lenk, 1982)。レンクは1981年に開かれた国際スポーツ哲学会第9回大会における会長講演“*Toward a Philosophic Anthropology of the Achieving Being*”で、オルテガの哲学に言及しつつ自己のスポーツ哲学を語っている。ここでは、批判の対象としてのみ、オルテガに関して言及されているわけではない。批判と肯定的評価の両面で語られているのだが、どちらかといえばオルテガを批判的に検討した上で、それを乗り越える哲学を打ち立ててゆこうとの気配がみなぎっている。

ホセ・オルテガ・イ・ガセー(1883-1955)は20世紀初頭のスペインを代表する思想家であり『大衆の反逆』は日本でも広く読まれている。彼はスペインのマドリッドで生まれ、1904年にマドリッド大学で博士号を取得する。翌年からドイツに留学し、主にカント哲学を研究する。『大衆の反逆』の訳者である神吉は、訳者解説の中で次のように述べている。「オルテガの知的環境を考える場合、スペインの『九十八年の世代』とともに、二十世紀初頭のドイツ哲学の潮流、特に、彼がマルブルクにおいて直接学んだ新カント主義と、その後の主流をなしたフッサールの現象学及びディルタイの生命哲学をも無視することはできない」(オルテガ、神吉訳、1995, p.287.)。オルテガはカント哲学と結果的には距離を置くことになるのだが、それでも思想形成にカントの影響を受けている。若き日のオルテガにと

ってドイツはあこがれの精神文化の国であり、晩年はいくつかの招きに応じてハンブルクやベルリン自由大学などで講演を行った。

では、実際にオルテガはスポーツに関して何を語っているのかについてみてゆこう。まず、1942年に書かれた『狩猟の哲学』を西澤訳に基づきながら取り上げてみる。そこでは「狩猟と幸福」の項でスポーツが次のように言われる。「幸福なる勤めは、これは確かだが、単に快楽ではない。それは努力であり、努力こそが本当のスポーツなのだ。だから労働をその疲労が多いか少ないかでスポーツから区別することはできない。両者の相違は、スポーツが奔放自在に、スポーツへの純粹の喜びをもってなされる努力であるのに対し、労働は結果目当てに無理矢理なされる努力であるという点にあるのだ」（オルテガ、西澤訳、2001、p.50.）。ここでまずオルテガはスポーツの性格特性を労働との対比で描こうとする。スポーツの努力は自由な純粹の喜びをもってなされ、その一方で労働は強制的な努力によってなされる。

また、「狩猟がこれほどまでに普遍的で、人々の熱中するスポーツだということ、つまり人間の幸福の最も純粹な催し物に属するということが成る程と分かってみれば」（西澤訳、2001、p.61.）と述べて、狩猟とスポーツを同一視し、それらを人間の幸福に結びつけている。『狩猟の哲学』はその題名が示すとおり狩猟について書かれているが、狩猟の本質描写の基底にはスポーツが置かれている。つまり、狩猟はスポーツと比較して同じ本質を持つが故に、人間にとって価値を持つという論法をとっているのである。オルテガが語るところによると、スポーツは人を熱中させるという。人間が物事に熱中すると必然的に行為形態は「努力」という精神的要素を帯びる。しかもそれは強制的ではなく、無意識のうちに行為に現れる。オルテガは次のように述べる。「だが前にも指摘したことであるが、スポーツは、そのことそれ自体の歓びによって行う努力で、こうした努力がもたらす他動的な結果を目指したのではない」（西澤訳、2001、p.127.）。「歴史というこの途方もない居心地の悪さと全面的な不安から、人間なる存在は狩猟というスポーツで、一時的に人為的に自然に『かえることにより』一息入れようとするわけである」（西澤訳、2001、pp.155-156.）。以上、狩猟とスポーツとの対比という点から次のことが言える。すなわち、両者がオルテガにおいて同一視されるのは、決して活動形態からではなく、その本質においてである。狩猟とスポーツは、たとえば同じように何らかのターゲットを目指して走ったり投げたりするから同じ

だとみなされるのではなく、それらがもたらすであろう人間の幸福感や努力、自然への回帰という点で同じであると解釈されているのである。

次に1923年の『現代の課題』におけるオルテガのスポーツ論をみてみよう。「そうした労働に対置されるものは、いかなる強制からも生じてこない、完全に自由な、かつ生命力の盛んな衝動であるところの別のタイプの努力である——それはスポーツである」（オルテガ、1923、1998、p.255.）。「だからしてスポーツ的精神でなされる努力には、つねにすぐれた、絶妙の美しさがあるのである。それは、通常の労働の報酬を計算する場合の量的単位ではかられるようなものではない。真に価値のある仕事はそうした不経済な努力によってのみ達成されるのだ——学問的創造、芸術的創造、政治上の、また道徳上の英雄的精神、あるいはまた宗教的聖徳は、スポーツ的精神の崇高な成果である」（p.256.）。オルテガにとって、世界はあたかも労働とスポーツに二分されているかのようである。人間にとって価値のある自由で創造的な行為はすべてスポーツとみなされる。

このように、オルテガはスポーツに全能的地位を与える。オルテガによればスポーツこそが生にとって必要な創造的活動であるということになる。これ自体がすでに誇張であるようにも思われるが、その創造的活動の源泉を「過剰なエネルギー」や体力という要素へと単純に還元してしまう態度にはレクならずとも疑問を持たざるをえない。特に近代スポーツはオルテガの「過剰エネルギー流出論」では十分な説明ができないだろう。確かに前近代のフットボールにはそれがあてはまるかもしれない。中村によれば、「マス・フットボールに参加した若者たちは、ボールを手にするや否や、渾身の力をこめて相手をかきわけ、つきとばし、踏みつけて、そのボールをゴールまで運ぼうとし、川を渡り、生垣を飛び越え、林を駆けぬけていったであろうし、そのような行為を禁じるどんなルールもなかった」（中村、1985、p.81）という。フットボールの原風景には確かに過剰なエネルギーが存在し、それがあふれ出ることによってゲームが成り立っていたと言えるだろう。しかしルールが整備されるにつれて、近代スポーツは近代スポーツとして倫理性を帯びた社会的現象となってゆく。近代スポーツは「エネルギー過剰説」で説明がつかなくなる。また、多木が「『スポーツ』なる概念はプレイヤーが技を競い、百分の一秒の差異を争う競技だけではないのである。もともとスポーツという概念は、発生の中から観客を含めた社会（社交）のなかで成立してきたのである」（多木、1995、p.10）と述べているように、社会現象として成立し

ているスポーツを「過剰エネルギー発散説」で解釈しきれぬものでもない。

オルテガはスポーツを労働のように他から強制される行為ではなく、創造的かつ自発的で純粋なる努力の行為であるとみなす。オルテガにとってスポーツは生における重要な要素であるのではない。レンクは「オルテガにとっての生は単にスポーツに類似しているということにとどまらず、根本的において本質的にスポーツそのもの」(Lenk, 1982)なのである。

レンクはこの点を批判する。なぜなら、「他の領域にも、創造的に生きることや、やり遂げることがありうる」(Lenk, 1982)からである。オルテガのスポーツ全能説はスポーツの意味することを消してしまう。すべての行為がスポーツであることによって、スポーツは何ものでもなくなってしまうのである。われわれの生きる世界はスポーツで覆われた世界ではないし、決して創造性や生きる歓喜にすべて満たされた世界ではない。むしろ現実の世界は退屈と悲哀に満ちているといえなくもない。レンクならずともオルテガの理屈を全面的に受け入れることは、少なくとも現実的感覚をベースにするならば困難といえる。

ただ、レンクはオルテガのスポーツ論を一刀両断にするも、そこにスポーツ哲学の胚芽を次のように認めている。「オルテガが生きた時代の感傷的な言葉遣いと同等にあらゆるものの同一視や過度の一般化は拒絶されるべきだとしても、感傷的態度や一面的な命題へのなし崩し的な一般化を回避しようとするならば、われわれはこのアプローチのなかに深い真理の胚珠を見いだすことができるかもしれない」(Lenk, 1982)。レンクが感知している「深い真理の胚珠」とは、スポーツの存在を生る哲学にまで降りてとらえなおすことである。オルテガ哲学のモチーフである生の哲学の文脈でスポーツを語ることに、レンクは人間として生きることの英知を探ろうとしている。確かにオルテガの言説をそのまま受け取ることにはできないだろう。しかし、われわれがスポーツをそれに応じた適切かつ繊細な見方で考察するならば、オルテガによる生の哲学からスポーツ世界を科学的世界とは異なる色彩豊かな世界として記述することが可能になる。それを可能にするためにはオルテガの見方を超えて次に言われるような態度がわれわれに求められる。それは、「たとえば法や政治の領域における現象と芸術やスポーツの領域における現象とを同一の見方で見るわけにはいかない。われわれは各領域、各対象に応じた見方を取るべく態度を整えなければならず、そのためにはそれなりの素養、修練が必要になる」(佐藤, 2005)。スポー

ツに対する過度の一般化を避けるための態度がわれわれには必要である。そうすることでスポーツは生命的世界、精神的世界の現実として記述されるであろう。

私は、医科学的世界の出来事を超えたスポーツの世界を展開するための契機を——それはいささかアンチ・テーゼとしての役割を負っていると言わねばならないが——オルテガ哲学に見る。おそらくレンクもそうであったろう。オルテガの生の哲学はスポーツ世界を生命的世界、精神的世界の現実として解読するための予言的言説のように思われる。

文献

- Adam, K. "Nichtakademische Betrachtungen zu einer Philosophie der Leistung". In: Lenk, H., Moser, S., Beyer, E. (Hg. 1973), *Philosophie des Sports*. 1973. S.22-33.
- Adam, K., Lenk, H. (Hg.) *Leistungssport als Denkmodell*. Wilhelm Fink, 1978.
- Huizinga, J. (1956, orig. 1938) *Homo Ludens. Vom Ursprung der Kultur im Spiel*. Rowohlt: Hamburg. 里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』河出書房新社, 1983.
- Lenk, H. "Task of the Philosophy of Sport: Between Publicity and Anthropology. Toward a Philosophic Anthropology of the Achieving Being". Presidential Address-1981. *Journal of the Philosophy of Sport*. pp.94-106. 1982.
- Moser, S. "Leistung und Kunst im Sport". In: *Philosophie des Sports*. 1973. S.34-41.
- Moser, S. "Ansatzpunkte einer philosophischen Analyse des Sports". In: *Philosophie des Sports*. 1973. S. 138-162.
- 中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』三省堂, 1985.
- オルテガ・イ・ガセー, 神吉敬三訳『大衆の反逆』筑摩書房, 1995.
- オルテガ, 井上正訳『現代の課題』. オルテガ著作集 1. 白水社, 1998.
- オルテガ, 西澤龍生訳『狩猟の哲学』吉夏社, 2001.
- 佐藤真理人「現象学的に考察するとはいかなることか」早稲田大学大学院文学研究科紀要, 2005. pp. 13-28.
- 多木浩二『スポーツを考える——身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書, 1995.
- ヴァレリー, 清水徹訳『エウパリオス・魂と舞踏・樹についての対話』岩波文庫, 2008.